

157 回定例研究会開催 「農の営み」から現代社会を見る

—アフリカと日本へのまなざしから—

5月20日（土）NTC コンサルタンツ(株)大会議室で、勝俣誠先生（明治学院大学名誉教授）をお迎えし、第157回定例研究会を開催しました。

今日、世界は豊かさと貧困の2極化が加速的に進んでいます。地球規模で俯瞰した場合、これまでは南北格差が主要な課題であり、富める国と貧しい国という捉え方で議論が進められてきたように思います。経済・技術・開発援助はまさしくこの視点から進められてきたものと言えます。しかし、富める国の内部でも格差の拡大は大きな問題となっています。トランプ政権の誕生や欧州における極右の台頭は、成長モデルの限界を象徴した出来事ではないかと思わせます。

私ども山崎農業研究所は、これまでも海外援助をテーマとした研究会を何度か行ってきましたが、今回は、富める国による貧しい国への援助といった単眼的な視点ではなく、「豊かさ」とは何かというベーシックな問題を、貧しいとされる国々からも学べることは少なくないのではと思い、今回の研究会を企画しました。このようなテーマにふさわしい講師として今回は勝俣先生をお招きし、ご講演していただきました。



勝俣誠先生の講演



研究会の様子

先生は、市場経済・成長モデルの指標の呪縛から離れた自由な視点から現代社会の諸問題を解説することの重要性を訴えられ、その指標として「農の営み」の自由性をあげています。その特徴は以下の通りです（講演レジュメから転載）。

- ① 「農の営み」は、人が自然に直接働きかけることによって自らの生命に不可欠な食料を入手できることを実感する最もわかりやすい営みだ、ということである。
- ② 「農の営み」の現代的意味は前者と関連するが、指図からの自由である。営みのプロセスが楽しく、ないし納得がいき、かつ生産物の意味を理解できる。
- ③ 「農の営み」は、世の中の景気変動からの自由である。例えば「自給3点セット」と呼ばれる山村で残存するモノで可視化可能。すなわち、1) 沢の水を貯める水槽 2) 小さな自給野菜農園、3)

農産物の保存や家具・農具・家屋の修理用器具の収納を目的とした納屋、である。

- ④ 「農の営み」では、すべてのモノに値段がつけられ、交換されるという市場のルールからの自由が可能である。

なお、講演に先立ち、勝俣先生からメッセージを頂いており、それを以下に紹介いたします。

講演者・勝俣誠先生からのメッセージ

私には2つのフィールドがあります。ひとつはアフリカ地域、そしてもうひとつが埼玉県のとしがわ町(旧都幾川村)です。アフリカ地域には国際政治経済学・南北問題の研究者として40年以上関わってきました。そしてとしがわ町には東京から移住して15年以上になります。としがわ町では、小さな農地と森をもっています。半農半X的暮らしです。

最近気になって仕方がないのが、日本社会における貧困や格差の問題です。しかしこれらの問題は日本だけのものではありません。貧困や格差は世界規模の問題になっています。そして日本社会においてより問題だと感じているのが、生きづらさや生き苦しさの感覚です。貧困、格差、生きづらさなど、これらは「豊かさとは何か」という問いと深く結びついています。しかし私の専門である社会科学の概念や用語は、この「豊かさとは何か」という問いに答えるには、いささか不十分であることを痛感します。人間の定義にかかわる「豊かさ」のもつ価値が一体何であるのかを語るのは不得意です。

そこで私が注目してきたのが「農の営み」という視点です。「農の営み」をひとつのレファレンス=参照基準にする、社会を捉えるうえでの立ち位置をまずは決めてみる、そしてそこでのズレから社会を捉え直してみる、という方法論です。「農業」ではなく「農の営み」というのはなぜか。「農業」というとどうしても産業論・経営論・技術論に限定されがちです。そうではなくて、もっと深いところにある人間にとって大切なモノやコトは何かという価値の点から考えてみたい、そこから、豊かさとは何かという問いにも接近できるのではないかと考えたのです。

「農の営み」という視点は、アフリカ地域ととしがわ町という2つのフィールドを行き来するなかからつかんだものでもあります。今回の研究会では、アフリカ地域の現状についての観察から、もっといえば私がアフリカ地域の「農」なるものから学んだことを入口にしたいと思います。そしてそこに日本のとしがわ町での経験を重ね合わせることで「農の営み」の意味を明らかにし、そこから、現代社会のもつ歪みの構造とは何なのか、豊かさとは何かについて考えてみたいと思います。

研究会の後半では、専門を異にする方々との対話と討論を通じて、現代社会のかかえる問題にどう私たちは向かいあうのかという方途を見出していきたいと思っています。たくさんの方々とお会いできることを楽しみにしています。

(明治学院大学国際平和研究所にて2017年4月19日談)

勝俣誠先生 略歴

1946年東京都生まれ。1969年、早稲田大学政治経済学部卒業。78年、パリ第一大学博士課程修了(開発経済学博士)。82年から84年まで、セネガルのダカール大学法経済学部にて勤務。明治学院大学助教授・教授を歴任し、2014年に退職。現明治学院大学国際平和研究所 Senior Research Fellow

【主な著書】

『現代アフリカ入門』 岩波書店〈岩波新書〉、1991年。

『サハラほのほり：サヘルの自然と人びと』 TOTO出版、1992年。

『アフリカは本当に貧しいのか：西アフリカで考えたこと』 朝日新聞社〈朝日選書〉、1993年。

福島原発事故のその後

川俣町山木屋等が平成 29 年 3 月 31 日午前 0 時をもって、避難指示区域が解除されたのを機に、町からの要請もあり、4 月に山木屋地区などを半年振りに見てきました。まだ解除間もないということもあり、ほとんど人は住んでいません。線量は場所によってかなり差があり、主要道路周辺などの平坦部は除染の効果もあり、放射性物質汚染対処特措法の適用要件である $0.23 \mu\text{Sv/hr}$ 以下のところが多いようでしたが、それでも $0.2 \mu\text{Sv/hr}$ 近いぎりぎりのラインのような感じがします(新宿は $0.05 \mu\text{Sv/hr}$ 程度)。また、スポット的に $0.8 \sim 0.9 \mu\text{Sv/hr}$ を示すところもあり、特に山林部の線量は依然として高いままのようです。山林の除染をどうするのかは今後大きな課題になりそうです。

我々としては、山林木材を活用したバイオマス発電により、地域エネルギーの発掘と山林除染を組み合わせた事業を提案しているところですが、国の助成金など、まだクリアしなければいけない課題が多く積み残されています。

農地は、いたるところに除染時に発生した汚染土壌を詰め込んだフレコンが山積みされており、必要最小限の基盤再整備が必要であると痛感しました。帰還して農業を再開したいという農家の方が何人かおられるということですが、帰還希望者は圧倒的に少なく、山木屋の農業の再開は見通しが立ちません。IT 機器を駆使したスマート農業による農作業の合理化が叫ばれていますが、山木屋のように、広大な農地はあるが農家が圧倒的に少ないところほど国が全面的にバックアップしてスマート農業を支援したらどうかなどと、つい考えてしまいます。



大熊町の現在の水田



原発敷地外の線量表示

山木屋から峠を越えて浪江、双葉、大熊町に入りますと(もちろん許可車両以外は入れません)、この地域は依然として帰還困難区域です。農地は完全にここ数年手が入っていないので、かつてここが農地だったのかが判断できないような光景です。福島第一原発敷地内も見学しましたが、敷地の外側で $3.3 \mu\text{Sv/hr}$ (新宿の 60 倍以上)、原発建屋の周辺は 0.03mSv/hr ($30 \mu\text{Sv/hr}$) を超えるかなりの高濃度の線量です。この中で毎日作業している人たちがいるのですが、彼らの健康は大丈夫か心配になります。彼らには今回の事故の責任はほとんどないのですが。



原発敷地内給水管に貼られた線量警告表示



未だ壊れた跡が残る原発建屋

第43期 山崎農業研究所会員総会の開催について

第43期の会員総会は以下の日程で執り行うこととなりましたので、お知らせいたします。具体的なプログラムについては、詳細が決まり次第、はがき通信等でお知らせいたします。

開催日 2017年7月22日（土曜日）

開催時間は13:00～17:00を予定していますが、具体的なプログラムは現在検討中であり、詳細は決定次第お知らせいたします。

場 所 NTCコンサルタンツ（株）会議室 東京都中野区本町1丁目32-2 ハーモニータワー20階
山崎記念農業賞

会員等から推薦のあった候補の中から精査して6月中旬までに決定する予定です。

会費納入と寄付のお願い

山崎記念農業賞基金の寄付募集

山崎記念農業賞は、会員の皆様からの寄付からなる基金で運営していますが、ここ5年間寄付を募っていないこともあり、基金残金が残りが少なくなってきています。山崎記念農業賞の主な支出は、授賞対象者調査費（主に交通費）、受賞者の旅費交通費（2名程度）と表彰楯制作費です。

大変心苦しい限りですが、どうぞ山崎記念農業賞の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

会費納入のお願い

山崎農業研究所は、会員の会費や寄付で財政のほとんどを賄っています。会費納入率が昨年度は83%でまだ十分とは言えない状況にあり、研究所の運営に支障をきたす要因となっています。まだ会費を納められていない会員におかれましては、是非会費納入にご協力くださるようお願いいたします。

入金先； 郵便貯金 山崎農業研究所 口座番号 10130-79304751

みずほ銀行 普通預金 山崎農業研究所 四谷支店（036） 口座番号 8043304

お願い

「ニュース」はできるだけ迅速にお知らせしたいので、未だ事務局にe-mailアドレスをお知らせでない方、新たにアドレスを取得された方（紙ベースでこのニュースが届いた方）は、下記までメールアドレスをご連絡くだされば大変ありがたいです。

〒164-8721 東京都中野区本町一丁目32-2 ハーモニータワー20階 NTC コンサルタンツ（株）

開発事業部 益永八尋 E:mail y.masunaga@ntc-c.co.jp